

青年海外協力隊マレーシア会

会報 第11号

発行 2017.6.30

あの頃の思い出

元マレーシア国駐在員 金城光男

空腹に耐えかねて、那覇市の中心街からちょっと外れた路地裏の小さな沖縄ソバ屋に飛び込むと、先客の、りゅうとしたネクタイ・背広姿の紳士が先から私に視線を集中していました。「金城さんですか？」といきなり声をかけられて、びっくり。マレーシア OB の久保田親典君でした。40年ぶりの再会。まさに奇遇でした。



庭仕事中の筆者近影

これを偶然かどうか、日を置かずして志岐さんからマレーシア会々報への寄稿依頼が舞い込んで来ました。別途「50周年記念誌」も送られて来ました。面白くて一気に読破です。隊員の体験記がびっしりと収載されており、マレーシア協力隊50年の歩みが年代別、地域別、職種別に、分かりやすく、緻密にまとめられています。永久保存に値する貴重な歴史資料だと感服しています。私の知っている面々も何人か登場しており、当時の思い出が生き生きと蘇ってきます。私も一筆書かせてもらう機会を頂き感謝しています。

私がマレーシア駐在員として着任したのは1976年、ジングルベルがそこここで聞かれる頃でした。「天国のようだ」というのが第一印象でした。横滑りで異動してきた前任地のエチオピアは軍事革命下にあつて、食糧不足、政情不安が深刻化し、毎日、不便をかこっていたので、マレーシアがことさら安全で豊かな国に思われたのでしよう。

とりあえずは「マレーシアホテル」に投宿し、翌朝、胸弾ませて協力隊事務所に出頭。事務所は、当時連絡所が併設されていたとは言え、女性も、外部の客人も訪れる聖域。そこに腰巻一枚、上半身裸で出入りする隊員の姿を見てびっくり！カルチャーショック第1号でした。「もっと文明人らしく振る舞おうよ！」が駐在員としての第一声となりました。

1969年5月に発生したマレー系と中華系の血なまぐさい衝突の余波がまだ残っており、巷間の相互不信感のつぶやきが私の耳にも届いて来ました。両者との付き合いには中立とバランスにかなり気遣いが必要で、精神的には疲れる思いがいつも付きまとっていました。

ブミプトラ政策という聞きなれない言葉も飛び交っていました。国内では発禁処分になっていたマハティール氏の著書を、シンガポールから取り寄せて読んでみる。要するに“最初から立ち遅れているマレー系住民と、経済的に優位にある中華系を同じスタートラインに並べて公平に勝負せよということこそが不公平である”と書いてあり、納得できる主張に思われました。諸分野、特に教育、職業の分野でマレー系（ブミプトラ）を優遇し、経済の不均衡是正を目指す政策だったのですね。

すでに戦後25年も立っているのに、地方に行くと反日感情がまだ残っていました。「日本兵に家族が殺された」と、いきなり怒りをぶつけられることも。日本軍による犠牲者の集団墓地というのが発見され、新聞で大きく報道されたこともありました。現場写真の中には死者を悼む隊員の顔も写っており、対応について大使館から

も注意を受けました。「日本人は過去の過ちを反省し、これからは新しい友情を築いて行きたいという願いを込めて、国造りのお手伝いに来ています。」と説明しようではないかと、隊員とは打ち合わせておりました。

隊員数では FELDA が一大配属先でした。次から次にジャングルが開墾され、広大な油やしやゴムのプランテーションが作られていました。切り倒された巨木が何日も燻り続ける光景に胸が痛む思いがしましたが、当時は経済発展が至上命令であり、自然保護を顧みるゆとりはなかったのかと思われます。いまや世界のパームオイル生産国となり、経済を支える大きな柱の一つとなっています。共に汗を流した貧しい入植者が、いまは農園経営者になって、大邸宅に住み、ベンツを乗り回しているのを見ると、自分がその発展の一端に関わったことに、感慨ひとしおだったという古賀夫妻の手記には共感を覚えます。(写真は駐在員当時に Felda 配属の古賀隊員と)



白山会長の手記にも心を打たれます。配属先からとつぜん教壇に立つことを申し渡される。準備不足のため、不安と面子に苛まれて、「七転八倒の苦痛に襲われ」る。しかし腹を決めて教壇に立つと、学生の笑顔に迎えられ、恐怖感が嘘のように引いていった。白山隊員は、「それを起点に人生観が変わった」と述懐しています。帰国後は地域の青年活動に積極的に加わり、その活性化にリーダーとして大きな貢献をしています。

協力隊は、日本青年の人格形成に貴重な鍛錬の場を提供しているなど納得しています。厳しい試練を乗り越えて、任務を達成した時、国際性豊かな教養を身に着け、前向きの人生観を会得していく。そういう隊員を私は何人も見てきました。

さて、最後に私の現況をお伝えしましょう。私は現役を引退して 65 歳で郷里沖縄に帰って来ました。まだ体力、気力とも十分残っていましたので、過去の体験が生かせるボランティア活動を模索している時、「カンボジア沖縄友好の会」に出会い入会しました。行き詰っていた会を立て直すため、貧しい農村地域の高校生を支援する「里親奨学金事業」を立ち上げました。ポルポト時代に多くの人材が失われ、現在なお人材不足が発展の足かせ

になっています。会の目的は人材育成ですが、加えて「顔の見える交流」「身の丈に合った活動」を基本理念として運営されています。

まず、貧しい農村地帯の高校生の中から学業成績を参考に毎年 20 名を選考し、高校卒業までの 3 年間、毎年 80 米ドルの奨学金を支給します。日本側では、彼らを一人一人世話する会員（里親）を募集。年会費は 1 万円。両者は最初にプロフィールを交換し合い相互に相手を確認します。原則年 2 回文通を行います。

「ビール代をちょっと節約すればいいか」などと言いながら会員になってくれる人もいます。事業開始から 13 年間で、約 230 名の高校生と 27 名の大学生支援(奨学金 350 ドル)実績を達成



カンボジアの里子と

しています。その努力が認められ、2011 年 3 月 11 日、奇しくも大震災の日に、西日本国際財団（福岡拠点）の「アジア貢献賞」を受賞しました。

「この支援がなければ自分は高校には行けなかった」と異口同音に感謝の気持ちが込められた手紙をもらうとき、ささやかでも人の役に立っていることが嬉しく、老後の楽しみとなっています。(了)

「想い」を「行動」に変える教育を目指して
～ 中高生対象ボルネオスタディツアーの報告とこれからの課題 ～

都立武蔵高等学校・生物教諭 山藤 旅聞

① 今、必要とされる教育とは

1961年、ソビエト連邦のユーリイ・ガガーリンが世界で初の有人宇宙飛行に成功した事実はご存知であろう。「地球は青かった」というガガーリンの言葉により、世界の人々は、地球はたった1つで、物質や資源は無限ではなく有限であることを認識したきっかけかもしれません。それから約50年経った今、世界はMDGs(国際ミレニアム開発目標)からSDGs(持続可能な開発目標)へと動き出している。MDGsの「貧困・飢餓・教育等の開発問題の解消」に加え、SDGsは「生物多様性や気候変動、天然資源の持続的な活用に向けた環境問題の解決」が加わった世界の目標となっている。世界は今、有限な地球資源の持続的な使い方への意識が高まっている。SDGsの解決に向けて、責任ある行動ができる人材育成が、強く教育現場に求められている時代になっている。

② 私の「想い」を「行動」へ

持続可能な社会や地域づくりに向けて、責任ある主体的な行動がとれる人材を育成する教育とはどのような教育だろうか。この教育の実現には、啓発や知識伝達のための教育では、とうてい次世代の若者の行動力を喚起することはできない。低炭素社会や、生物多様性に基づく自然との共生社会、もしくは循環型社会を多面的に理解し、責任ある主体的な行動を喚起するためには、教育現場に新しい教育が必要と考えている。しかし、現状の教育では、教科書による啓発、もしくは教師やメディアによる脅迫的で、偏りのある無責任な伝達が目立つ。また、行動については、ゴミの分別や、募金活動が中心で、このような問題に関心を持つ生徒たちに有効な教育ができていない状態だと思う。また、日本の政府の施政方針も、「環境問題」への意識は低く、国民側も内閣への優先的に取り組んでほしい課題としての「環境問題」の順位は例年低い(読売新聞社調べ)。持続可能な社会を目指すためには、次世代を創り出す子どもたちへの意識改革が必須と考え、学校の枠を超えて、中高生を対象とした具体的な環境教育プログラムとして、中高生対象のボルネオスタディツアーを企画し、2年間実施してきた。その成果と課題を報告したい。(地元の中高生と一緒に植林活動する前に記念写真)



③ 中高生対象ボルネオスタディツアーのねらい

渡航した中高生は都内の学校に通い、学校を越えて公募して集まった8校47名(2年間のべ数)の中高生たち(さらに2名の大学生も参加している)。フィールドは、ボルネオ島のマレーシア・サバ州。ここでは、熱帯雨林が切り倒され、パーム油を採取するために作られたアブラヤシのプランテーションが地平線まで拡大している現場を観察できる。一方で、ボルネオの森や川をトレッキングすると、実に多種多様な動植物を観察できる。この2つの体験だけで、アブラヤシプランテーションの拡大は生態系を大きく変え、もともとあった熱帯雨林の多様性を失わせ、現地に生息していた固有種の生活の場を消滅し、絶滅の危機に追いやっている現状を痛烈に感じることができる。さらには、アブラヤシのプランテーションになったことで現地の人たちの所得は増え、便利で快適な生活を求める現地の人々の姿も感じることができる。現地学生との交流も、このツアーの大切なコンテンツにしているのだが、現地の学生は、プランテーションによる生態系の破壊を把握してい

ないことが分かってくる。一方、日本人は、普段良く食べているカップ麺やアイスクリームなどの食品や、日用品として必須な石けんや洗剤、化粧品など、毎日の生活を支える食品や製品が、プランテーションによって生産されるパーム油から作られ、大量に消費していることを知らずに購入を続けている現状もある。加えて日本では、石油由来の原料から天然素材を原料とする製品への転換として、地球に優しい製品として植物原料への転換が進められ、消費を促進している現状もある。私たちは、知らないうちに、熱帯林伐採の恩恵を被っていると共に、熱帯雨林破壊の加害者になっているのである。渡航した生徒たちは、このジレンマを、現地で五感のすべてで感じとる。この「経験」をしてもらうことがツアーのねらいである。この「経験」によって、生徒たちは課題解決に向けて、実に様々な疑問を作り出すようになる。(地平線まで広がるアブラヤシプランテーション)



④ 参加した生徒の「今」

知識ベースで理解していた「熱帯雨林の保全」をどのようにして現地の人たちと一緒に取り組んでいこうかと思って渡航した中高生たちは、教科書やマスメディアで学んだ知識と現実があまりにも違っていることに衝撃を受ける。単に開発をストップさせれば問題が解決できるほど現実には簡単ではないこと、互いに両立の難しいトレード・オフの関係が入り組んでいることに気付かされるのである。そして解決への壁がものすごく高

いことに頭を抱えながらも、それでもどうしたらよいのか必死に自分で考え始める。帰国後、自分たちにできることは何かを必死に考え、校内発表はもちろん、仲間と一緒に学会で口頭発表やポスター発表、大学や NPO・NGO 主催のシンポジウムへの参加など、能動的な「行動」に転換している生徒が多くいる。また、大学進学を明確にし、学習に打ち込む生徒もたくさんいる。さらには、動物園や水族館との連携を図ろうと交渉に動き出す生徒たちや、JICA と連携したイベントの企画を実施している学生もいる。

(2016年8月 日本環境教育学会で発表の様子)



⑤ 課題と解決方法の模索

ここで課題がでてきた。こうして現地を見て、問題意識を高めた中高生たちが、これから第3陣、第4陣とツアーを継続していけば、課題を自分ごとにとらえ、行動をかきたてられる生徒が増えていく。物事を単純化して都合の良いところだけ見るようなことはせず、全て百点満点の答えは出せないにしても、その中で何とか最善を尽くして折り合いをつけつつ、現状を少しでも良い方向に変えていこうと自発的に考えようとする次世代の生徒たちが育っていく。しかし、このような生徒たちが次に「行動」できる「場」が少ないのである。本物の課題と向かい、真剣に考えるためには、学校では限界がある。社会の課題解決に取り組む企業や NPO・NGO との連携が大切だと思っている。学校現場と社会課題が密接につながり、社会課題の解決に向けての「学び」こそが、これからの教育に必要な本来の姿なのではないだろうか。持続可能な社会の実現に向けてフィールドワークを軸にした教育デザインを今後も考え続けていきたいと思っている。

現地の教員と協働の授業づくりを目指して

山田 奈緒（平成 28 年度 1 次隊 障害児者支援）



「パギー！チェグー！」と、子どもたちの明るい笑顔と元気な挨拶に迎えられ、タイムカードを押し、自転車通勤で汗だくになった服からバジューロンに着替えて、子どもたちのもとへ。

サバに来て 8 カ月。これが毎朝の習慣です。私は和歌山県の教員として特別支援学校で 8 年、中学校で 3 年間勤務した後、現職教員特別参加制度で青年海外協力隊として、現在はサバ州の

ブタタンという町のセカンダリースクール特別支援学級で活動しています。マレーシアの教育省傘下の特別支援教育サービスセンターのサバ州事務所に配属され、サバ州内の盲聾学校、各小中学校の特別支援学級を、3 か月ごとに巡回し、現地の教員とともに障害にあわせた授業を協働で実践し、日本の障害児支援のアイデアを提供することが主な活動です。

こちらでは、自分の力や知識の未熟さを感じながらも、少しずつ自分の思いを言葉や形に変えながら、自分らしい、身の丈にあった活動の形が見えてきつつあります。現在の活動先の学校は 4 月末までの予定でしたが、期間延長をお願いして、6 月末までにしていただきました。理由を挙げれば色々ありますが、シンプルに、この学校の先生たちともう少し一緒に働きたいと思ったからです。こちらの先生たちとの教育観の違いは確かにあるけれど、でも、通じ合う教育観もある。通じ合える人がいる。一人ひとりの成長を同じ観点で評価できる先生に、この学校で出会えたことで私は大きく救われたと思っています。私が言葉でうまく伝えられなくても、教材を作って持って行くと、それを見るだけで教材の意図を汲み取り、生徒に丁寧に繰り返し指導してくれます。なかなか出会える人ではないと感謝しています。一緒に授業に入りながら、先生たちが持ってくる教材のバリエーションが増えてきたことに、一人喜びを感じる日々です。



彼は言葉が増えたね。彼は授業に落ち着いて参加するようになった。もっと彼らの活動の機会やバリエーションを増やしたいね。教材を変えれば、生徒の新しい一面が見えて、おもしろい！等と話をしながら授業づくりができていく今の環境で、さらに自分の持っているアイデアを提案し、先生たちの授業づくりの一助になれたらと考えています。

マレーシアと日本が外交関係を樹立して今年で 60 周年を迎え、先日皇太子殿下がマレーシアを訪問された際、我々青年海外協力隊員をご接見下さり、一人ひとりの目を見、温かくお声をかけて下さったことに感動しました。皇太子殿下はマレーシアのイメージについて、“民族、宗教、文化などの多様性を維持しながら、寛容性を持ってその違いを克服し、国の発展につなげてきた”と言及されました。1)



正にサバ州には、30 を超える先住民族に、さらにマレー半島からのマレー系、中華系、インド系の人々が共存し、これらの民族と宗教の多様性によってもたらされる、食文化の豊かさ、世界遺産キナバル山をはじめボルネオ島の自然の豊かさがあります。そして、その中で育まれたサバの人たちの寛容さ、心優しさに包まれながら、これからも、サバの人たちにとって必要なことは何か、自ら考え、自らの思いを少しずつ形にしていきたいです。マレーシア、サバでの「出会い」と「縁」を大切にしながら、……

【引用文献】

1) 『デジタル朝日新聞』 皇太子さま、マレーシア訪問に際しての会見全文 2017 年 4 月 12 日
<http://www.asahi.com/articles/ASK4D3T4YK4DUTIL00J.html>

ボルネオ隊員視察報告

坂部修一 (S55-2/水産)

3月20日から23日に富山県青年海外協力隊を育てる会主催でサバ州で活動している隊員の視察を実施しました。参加者は白山会長、富山・千葉県各理事、筆者の4名でした。

隊員時代から37年経過し、近代化したコタキナバル国際空港には、驚くばかりでした。

空港には、今回活動を視察する西村一也隊員が迎えに来てくれていました。西村隊員には、視察期間中のコーディネート全般及び全行程に同行してもらい、大変お世話になりました。また、白山会長、筆者と同時代にサバで活動した牧野さん(水産隊員)も迎えに来ていて、懐かしい再会となりました。牧野さんは隊員終了後も殆どコタキナバルに在住しています。

翌日、チャーター車で西村隊員の勤務地であるキナバル山(標高約4100m)の登山口にあるキナバル公園局に行き、エコリンクプロジェクトと隊員活動の報告会に参加しました。

報告会には、プロジェクトマネージャーのDIN女史はじめオフィサー、カウンターパート、スタッフも参加し10名程で行われ、昼食のサービスまで用意してもらいました。



報告会の様子



公園局スタッフと

報告会後は、プロジェクトの一環で植林事業を実施している **Kampung Bundu Tuhan** を訪問しました。その後、クンダサンでキノコ栽培の活動をしている三田岳隊員を視察しました。三田隊員は、KPDの事業の一つであるキノコ栽培場で現地作業員に対して生産から出荷までの技術指導を行っています。シイタケ以外の品種の栽培にも意欲的に取り組んでいます。(写真右はカンボンの人たちと)



栽培場の宿舎に住んでいますが、町から離れているうえ、移動手段となるバイクが無いため、仕事にも生活にも苦勞しているようです。バイクが支給されていれば、シイタケを実際生産している農家にも直接技術指導ができる等活動の幅が広がるとの言葉が印象的でした。

その晩は、西村隊員、三田隊員と夕食を共にし、活動状況を聞きながら交流を深めました。

翌日は、ポーリン Hot Spring へ行き、自然散策と足湯を体験しリフレッシュしました。

コタキナバルへの帰路の途中、花の大きさで有名なラフレシアを偶然見られる機会を得たことと、パサールでドゥリアンを味わうことができたのが、今回の視察に花を添えました。

今回の視察に多大な協力をして下さった、西村隊員、三田隊員に感謝します。



三田隊員と配属先で

国際人への道、マレーシア

弓場秋信 (47-2 溶接 コタバル 職業訓練校)

協力隊の広報と国際性豊かな青少年の育成を目的に「鹿児島県青少年国際協力体験事業」を平成3年に始めた。



写真右浴衣姿は筆者

議な光景。女子団員が用を

足した後左手で水を使いきれいにした、と報告する。男子2人のステイ先は、トイレも水浴び場も無くその都度近くの川へ。

想像以上に現地の環境を受入れ溶け込む団員10名の変化に大きな収穫を感じた。以来現在までマレーシアに9回、インドネシアに2回、タイに2回、ベトナムに6回、ラオスに3回、カンボジアに2回、317名の中高生と41名のマスコミを派遣し、今年26回目を迎える。

1回目は、チーム派遣されているマレーシアサバ州サリマンドウ村。鹿児島の中高生10名とマスコミ2名そして私を含むOB4名と県からの1名を派遣。村での4泊のホームステイ期間中に稲作、保健師、村落開発の隊員活動現場視察、村の子供達との稲刈り、足踏み脱穀機の製作などを行った。

中学校1年の男子団員(現在高校教師)がサッカーボールを持って、同世代の現地の子供と話をしているので近寄ってみると、鹿児島弁とマレー語での会話。通じるはずのない2人が打ち解けている不思議な光景。



青年海外協力隊マレーシア会第4回総会開催案内

第4回マレーシア会総会を下記要領で総会を開催いたします。参加をお待ちしています。総会は2年に1回の開催で、前回は協力隊50周年記念としてクアラルンプールで開催いたしました。国内での開催は4年ぶりとなります。できるだけ多くの方々の参加を願い、例年より会費を低くいたしました。万障繰り合わせての参加をお待ちしています。

日時：平成29年9月17日(日)15時～19時

受付開始：14時

場所：JICA地球ひろば(市ヶ谷)2階 国際会議場 (平成25年度開催の第2回総会と同じ会場です。)

プログラム：15:00～総会

15:30～講演会：坪内俊憲

(講師はボルネオ保全トラスト
ジャパン特別顧問で協力隊OB
ザンビア派遣55-2)

17:00～懇親会 **差し入れ歓迎!** (地球ひろば内、J'sカフェ)

懇親会費：一人3500円、ただしご夫婦で参加の場合は、二人で6000円。子どもは無料です。

プログラムや開催要領は、国際協力サロンのwebサイト(下記)上に随時、掲載いたします。

<http://ics-together.com/jocvmalaysia.htm>

申し込み：電話：090-7186-1065

メール：malaysia@ics-together.com

郵送：裏面住所まで

申し込み締め切りは8月末日です。

会報名募集結果

応募の中から、①Angin kedua ②Jumpa lagi ③ Bunga raya ④ Kawan kawanの4点に絞りました。総会で決定したいと思います。多数の応募ありがとうございました。



協力隊まつり 2017 出展

4月22日・23日

今年も協力隊まつりに出展いたしました。今年の協力隊まつりは昨年に比べて入場者が多く、昨年(1210名) 今年(2058名)の入場がありました。入場者の内訳は、会社員、学生が同じ位の割合で、二日間ほぼ同数の来場がありました。

JICA 音楽部によるオープニングセレモニーで始まりました。各OB会の展示と物販はバラエティに富み、まつりの雰囲気が出ていたと思います。

セミナー、ダンス、映画クロスロード上映と内容も盛り沢山でした。その中で新しくボランティアの派遣が決まったミャンマー、そのミャンマーからの留学生達による踊りも披露されました。

マレーシアブースでは物販に加え、都内、中高生によるボルネオスタディーツアーの報告のパネル展示をいたしました。この展示は多くの来場者(特に、学生)の注目を集めました。

今年も盛況に終了する事が出来ました。お手伝いいただいた方、ありがとうございました。また、ボルネオ森林保全への募金は、日本マレーシア協会に寄付いたしました。



「行動したい」中高生・大学生集まれ!!! 持続可能な社会につなげる第一歩

6月3日～6月17日の間、地球ひろば2F展示コーナーで中高生のボルネオスタディーツアーの写真が展示され、6月10日には上記タイトルのセミナーがJICA地球ひろば主催、当マレーシア会協力のもと、JICA地球ひろばで開催されました。SDG'sや環境、地域おこしなどの多彩なゲストを迎え、多くの中高生・大学生が参加、各発表を聞いた後、グループに分かれて登壇者と参加者の熱い質疑が交わされ時間が足りないほどでした。

寄付のお礼・・・ありがとうございました!

工藤雅彰(57-2)より10,000円のご寄付をいただきました。活動費として、大切に使用させていただきます。なお、寄付は随時受け付けています。よろしく願いいたします。

振り込み先:

郵便局記号: 10140 番号 51611341

(郵便局外から振り込みの場合: 店番 018、
普通口座 5161134 です)

口座名義人: 青年海外協力隊マレーシア会
代表 白山 肇

事務局からお願い:住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在500余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇
162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5
JICA 地球ひろば メールボックス 51
TEL: 090-7186-1065 (国際協力サロン)
MAIL: malaysia@ics-together.com
URL: <http://ics-together.com/jocvmalaysia.htm>